

メディアとの向き合い方について

内田 樹 (凱風館館長・神戸女学院大学名誉教授)

というお題を頂いた。これを「メディア・リテラシーとは何か？」に読み換えて私見を記したい。

「メディア・リテラシー」は「メディアから伝えられる情報の真偽を判定する能力」のことではない。そう思っている人がいるかも知れないが、そんな能力を持っている人はいない。私たちは世界で起きているほとんどの出来事について、何が起きているのかをよく知らないからである。この世のできごとのほとんどについて、私たちはそれが起きた文脈も、誰の言い分に理があるのか、対処法も知らない。

情報そのものの真偽を判定する能力はないけれども、私たちは自分がどの情報を選択的に受信すべきかは分かる。それで十分だと思う。私たちが受信する必要のない情報の真偽なんかははっきり言って「どうでもいい」からである。

どうやって「受信すべき情報」と「受信する必要のない情報」を選択できるのか、怪訝に思う方もおられるだろうが、実は人間は誰でもその能力をすでに発揮したことがあるのである。

母語の習得がそれである。私たちは赤ちゃんのとき、母語をまったく理解しない状態から母語の習得を始めて、短期間のうちにその熟練した話者になる。それができるのは、自分に語りかける人たちからの暖かい波動を繰り返し受信しているうちに、「自分はこの暖かい波動の宛先である」ということを確信するからである。「私がメッセージを聴く」のではない。「ここに

メッセージの宛先がある。それが〈私〉だ」という順序で私たちは自我を立ち上げる。「私」なるものがまず自存していて、それがメッセージを聴いたり、聴かなかったりするわけではない。

周りを行き交う無数のシグナルのうちから私たちは「自分宛てのメッセージ」とそうではないものを聞き分けることができる。コンテンツが意味不明であっても、その宛先が私かそうでないかはすぐに分かる。そして、私は「自分宛てのメッセージ」だけに用事がある。さしあたりそれだけが私にとって意味のあるものであって、それ以外のものは単なる「ノイズ」である。

ただし、私の言う「ノイズ」は「偽命題」とか「嘘」とか「フェイク」という意味ではない。宇宙の真理を語ったものでも、「私宛てでないもの」は悪いけれどノイズである。

私宛てであることが確信できたメッセージに対して、私は真剣になる。それがどれほど難解であっても、全力を尽くして、解説しようとする。容易な接近を許さぬほどに難解なものであるほどむしろ真剣になる。その解説作業を通じて、私たちは見知らぬ他者からの、理解も共感も絶した、前代未聞のメッセージの正当な受信者となり、やがてそれをおのれの血肉として、自分を創り上げるのである。

そのメッセージは私宛てか、そうではないのか。それを判断する力を私は「メディア・リテラシー」と呼んでいる。個人的な定義だが、しばらくはこれで通すつもりである。